九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

うつほ物語の研究 : 琴・孝・君子の物語

余, 鴻燕

https://hdl.handle.net/2324/4474909

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏　　名　：余　鴻燕

論 文 名　：うつほ物語の研究--琴・孝・君子の物語--

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

従来『うつほ物語』は、俊蔭一族が天人から琴を将来し、その琴を四代にわたって相伝し、孝の達成とともに栄華を繰り広げてゆく物語だとして読まれてきた。しかし、実際には、この一族にとって、琴だけでなく、学問もこの一族の性格を論じる際に欠かせない要素である。「蔵開」巻ではじめて公開された清原一族代々の蔵には、大量の書物などが保管されている。蔵を開いたことによって、一族の全体像がはじめて見えてくるのである。

また、従来の研究方法として、琴の一族において、俊蔭と仲忠とを分けて考察し、俊蔭を「隠居の君子」、仲忠を「為政者」と考えている。しかし、俊蔭の残した大量の書物の発見により、俊蔭の人物像は隠居者とはかけ離れてくるため、俊蔭像の再考とともに、一族の琴と学問との関係を改めて考える必要性が出てくる。本論は、俊蔭と仲忠の間の繋がりを手がかりとして、『うつほ物語』の縦軸となる琴の一族にからむ孝の問題と、一族が儒教理念の実践のもとで君子になることの道程を考察したものである。

第一章では、俊蔭一族が所持する琴をその由来から考察するとともに、俊蔭漂流譚の物語全体における意味を確認した。俊蔭の死後、俊蔭女と仲忠はその遺言を守り、琴を伝授し、都に復帰してからもその琴を公開しないようにしている。こうした「非公開」の琴の論理は、同じく琴の名手である源涼が積極的に披露する態度とは対照的である一方、この遺言を守る行為は、いわば俊蔭への孝とも言え、一族は孝と琴の論理に従いながら生きていると考えられる。

第二章では、俊蔭一族だけでなく、物語全体においても大きな主題の一つである孝の問題を考えてみた。物語において、仲忠が孝子として造型されていることは『孝子伝』故事の引用からも明瞭であるが、従来継子譚として読まれてきた「忠こそ物語」も、その骨格がまた『孝子伝』の舜子譚を踏まえていることを確認した。仲忠が孝を実践しているのに対し、忠こそは不孝の道をあゆみ、結果として孝を守った仲忠は家を繁栄させ

たが、忠こそは出家して一門も没落したのである。一見独立性の高い仲忠の孝養譚と忠こそ物語だが、その「孝」と「不孝」との対照によって、俊蔭一族に見られる孝と家の論理が浮き彫りになることを明らかにした。

第三章では、物語の軸となる俊蔭一族の「琴」と「書」の問題を考察してみた。まずは藤英の成功譚に注目し、物語における藤英の成功は、あくまでも「文章」という一つの分野のものであり、その才能も国家政治に用いられるのではなく、源正頼家のものになってしまい、いわば、学問の専門家になったのである。「専門家にならない」という信念は、俊蔭の辞官にも大きく関わる要因である。そして、この理念は一族の学問を継承した仲忠にも受け継がれ、物語後半に見られる琴の名手から政治家への変貌とも連動していくのである。

第四章では、物語後半に位置する「蔵開」三巻を考察した。蔵の中から発見された大量の唐物はこの一族にとって重大な意味があり、かつて「財の王」と呼ばれた種松と涼の財物とは一味違って、これら文字通りの「唐物」は一族の権威性を象徴するものである。仲忠は蔵で発見した日記と家集を天皇に進講し、この家集進講によって、一族の学問の伝統と栄光が再び呼び覚まされ、菅原道真の「献家集」をも思い出させるように、仲忠の人物造型には道真が色濃く影を落としている。また、家集進講が学問の家の再興をもたらす一方、ここには一族の学問の特殊性も窺うことができる。

第五章では、一族がふまえてきた儒教の理想を確認してみた。俊蔭一族は、琴の専門家にならないがために、天皇家と距離を置いてきた。仲忠は、琴と学問という家の遺産を利用し、一族の独自性を保ちつつ、琴を携える人物に相応しい、理想的な君子に成長してきた。俊蔭の達成しえなかった理想に接近すると同時に、天皇家との関係までが次第に修復される。物語の末尾に描かれる楼の上での琴の公開は、琴と王権との間に和解が成立し、儒教の最高理想を代表する琴はやがて天皇家と融合し、より安泰なる世の中の出現を予感させるものである。

本論文では、「琴の一族」と呼ばれた俊蔭一族に注目し、一族のなかで特に俊蔭と仲忠との生き方の対比と関連に重点をおいて考察した。従来それぞれ異なる生き方を選んだと考えられてきた二人の間に、実は底流する一族の共通理念があり、仲忠は俊蔭の遺志を受け継ぐ形で、俊蔭の「不完全さ」を補完しつつ、一族は琴のもとでより理想の君子へと成長していく物語として、新たな視点を提供することができた。今後の課題としては、琴と祝祭の論理や、当時の社会背景から考える「琴の物語」の意味など、まだ十分に研究しきれていないテーマが多々あり、これらのテーマを究明することによって、『うつほ物語』の全体像もより見えてくることが期待される。